

『歌を掛け合う人々―東アジアの歌文化』

真下厚、手塚恵子、岡部隆志、張正軍著

三弥井書店刊

本書は掛け合いの当事者に焦点をあてて、「歌を生み出す力」を明らかにしようとする(真下)。フィールド調査で通訳やインフォーマントとして長く協力関係にあった個々人が、ライフヒストリーやオーラルな歌掛けの内実、歴史文化の変遷等を語っている。「奄美島唄に生きる」・徳之島のウタシヤ 治井秋喜氏の場合(真下)、「野のうたびと」中国壮(チワン)族 莊宏(ジャン・ホン)の生涯(手塚)、「歌垣とともに生きて」中国白(ペ)族 施珍華へのインタビュー(岡部)、「歌を作る人々」中国湖南省鳳凰県苗(ミャオ)族の村から(張)の四章からなる。

四者に共通するのは、固有の書き言葉(文字)を持たないオーラル(口頭的)な少数言語に属し、かつ即興的な歌の掛け合いが盛んで、文化の基本要素として重要であるという点だ。それゆえ「一九八〇年代までは若者は歌掛けによって恋愛してきたが、最近では恋の歌掛けはもっぱら舞台の上のみ」「苗族と漢族との通婚率はあがる一方で、家庭内では漢語で会話し、義務

教育も漢語でなされ、在学中苗族の歌をおそわることはなく、漢語の流行歌をうたう。就職では漢語を共通語とする地域に入って漢族社会に溶け込んでゆく」「村に残った老人たちも苗族同士の会話は苗語であるが、見ているテレビは漢語なのである(張)」という現状は、奄美にもあてはまる点が多い。さらに「観光や自民族のアイデンティティ発露のため歌掛けが演出され、文化財指定等により育成・保存・活用がはかられる」「儀礼や舞台の上での歌掛けは、現代の社会状況に応じて変わりながらも統いてゆくだろう」との指摘も普遍性がある。

個々のトピックスにも触れておこう。

★真下報告では、島と神戸との往来の中で唄者として形成されてゆく動態、「歌遊び」という歌のありようが示される。幼少時から島唄に身を浸して育った体験は、奄美の唄者に特徴的だ。さらに人の生と死に歌が密接に絡む状況は、徳之島ならではの深みではないかと思う。奄美島唄は明治期にはかな漢字を用いて(不十分なながらも)表記され、歌詞の記録の蓄積は豊富だ。

既成の歌詞も相手や自分の思いと響き合ってうたわれる時、一回性を帯び、その都度「生み出される」のだと真下はいう。★手塚報告では、書き言葉の問題が大きい。中華人民共和国の民

族政策により、二十以上の集団を統合して民族が誕生(人口一五〇〇万)。共通の書き言葉(壮文)が創出され、民衆に教えることになった(文盲一掃運動)。しかしすでに使われてきた漢字系の「方块字」や「漢語漢字」のはざまで、アルファベットの「壮文」は馴染みにくい。そこで莊宏は土地の歌を壮文で表記して教えた。書き言葉を持たないと歌は消えていく。「方块字」も「漢字」もあてはまらない場合「壮文」はアルファベット式に表記できるので是非活用したいと説く。土地の掛け合い歌への愛着と、口承の歌を書き記す過程が印象的である。★岡部報告では「歌恋人」が興味深い。かつて結婚相手は主に親が決め、真の恋愛は「歌垣」に求めた。恋愛関係にあるとの仮構に基づく「歌恋人」と、虚々実々のやりとりが時に三百首に及ぶ。文学的なテクニクが駆使され、歌の脈絡、良い歌(韻文)の条件、掛け合いが長く続く論理などが考察される。★張報告では「歌師」の存在が注目される。依頼に応じて歌詞を作成する専門家で、報酬も得る。漢字表記の記録やSNSなども駆使し、切磋琢磨を怠らない。以上政治経済の変動を乗り越えて続く歌を作る営みに、本書はあらためて目を向けさせる。

(酒井正子)

(二〇一七年八月／本体二五〇〇円)

『浦島伝説の展開』

林 晃平著
おうふう刊

著者・林晃平氏が大著『浦島伝説の研究』を上梓したのは二〇〇一年二月であった(その内容については本誌第二十五号の書評に取りあげた)。今回の著作は、その前著を受け継ぎ、その後の徹底的な調査と研究を踏まえた論考群に資料編を添えた六五〇頁にもならない二冊である(前著を加えると一五〇頁)。その生涯をかけたと言っても誇張にはならない二冊の成果に対し、まずは深甚なる敬意を表したい。

日本文学史のなかに遺された古さと深さ、そして広がりというところから一つの作品を眺めた時、浦島子あるいは浦島太郎と呼ばれる男の物語(伝説・昔話)に比肩しうるものはほとんどないのではないかと思う。それほどに、古代から現代まで途切れることなく、多彩なジャンルのなかに姿を変えながら生き続けてきた、それが「浦島」だということを、二冊の著作は余すところなく教えてくれる。

前著『研究』では、古代に生みだされた浦島伝説(物語)が、中世・近世を経て近代へと至る過程を丹念に追いながら、その文学史的な在

り方が見透されていた。そして、その続編となる今回の『展開』は、当然ながら前著を受け継ぎつつ、新たな方向へと「浦島」研究を飛躍的に展開させているということが出来る。それは、文学史的にいえば、それぞれの時代の諸本をより厳密に読み解く作業として示される。たとえば、御伽草子「浦島太郎」についてみると、新出資料を含めて網羅的な諸本の比較研究を行い、本文の特徴を比較したうえで諸本の系統を整理している。また、本書巻末には、草双紙「浦島小太郎」、絵巻付「びっくり浦島天上がへり」、縁起「浦島太郎一代記」、六段本浄瑠璃『伊勢外宮由来附浦嶋龍宮入』、オックスフォード大学蔵絵巻「浦島太郎」、コロンビア大学蔵縦型奈良絵本「浦島太郎」の翻刻が掲載されており、浦島研究のなかに新たな文献資料が加えられたのも、著者の長年の地道な調査の賜物だということができるだろう。

そうした文献学的な研究は、著者が文学研究に立脚した研究者であるという点からすれば当然だが、一方で、本書『展開』ではもう一方の重要な側面が大きな役割を担っていると言いうことができる。それは、「浦島」伝説を支える図像あるいはイメージの問題である。ただし、このことはすでに『研究』のなかでも

指摘されており、「新しいメディア、新しいジャンルに浦島伝説は敏感である」(序章「浦島伝説略史」)ことが論じられていた。それが『展開』では徹底的に掘り下げられ検討される。

五本の論文からなる「Ⅱ 亀のイメージとその展開」や七本の論文が並ぶ「Ⅳ 異界のイメージの形成と展開」などの章を読むと、そのあたりの著者の主張はよく理解できるはずである。たとえば、『研究』でも取りあげられていた「蓑亀」という存在について、先年、明日香村の酒船石遺跡で見つかった亀形石造物にみられる神仙思想における瑞祥としての亀を枕として、耳があり長い毛の尾をもつ亀(蓑亀)が近世文献のなかの図像としてどのように描かれ、それがどのように変容していくかを辿る。そしてそこから、枝をくわえた亀のイメージ、亀の背に建つ石碑(亀跡碑)の建立の背景やそのさまざまな意匠などへと論は及び、著者のキーボードを打つ指は留まるところを知らない。

そのようにして、「浦島」伝説は解き明かされていく。「浦島」伝説に限っていえば、おそらく誰も、著者を越えようとは思わないのではなからうか。

(二〇一八年五月／本体二二〇〇円)

『傳承文藝第二十二号』

岩手県下閉伊地方昔話集

傳承文藝第二十二号編集委員会・品田実子・野田真知子責任編集

國學院大學民俗文學研究會發行（井出喜勝發行責任 國學院大學文学部花部研究室）

國學院大學の学生サークル・民俗文学研究会の第二十二冊目の探訪報告書（同大学は調査を探訪という）。岩手県下閉伊郡の岩泉町・旧新里村（現・宮古市）、旧川井村（現・宮古市）の、昔話六十七話、そして地域に広く伝承されていると思われる「八郎太郎」や、噂として活きている気配をうかがわせる生々しい「六部殺し」の話などが「伝説・世間話」として一つのカテゴリーに二十八話収録されている。巻末の「話者一覧」によると、当時、聴き取りの対象になった話者一六八名のうち、明治三十年代生まれの話者が最も多く明治二十年代から四十年代生まれの話者が約九十名にのぼる。なかには、中仁沢ヒデさん（明治三十八年生）のように、三十話近くの昔話を語っている話者もいる。

民俗文学研究会が同地を訪れたのは、昭和五十一年七月から八月にかけての本探訪、同

五十二年三月、同五十三年三月の追探訪であつたという。

この探訪に関わつたのは、当時の教員・白田甚五郎、野村純一、山賀七郎の三氏に、八名の卒業生、二十一名の学部生であつた。そして本書は、今は既に還暦前後になつていてであろう当時探訪に参加した学部生の有志たちが刊行したのである。巻頭には、花部英雄氏による「『傳承文藝』の顛末―民俗文学研究会の栄光の歩み」が掲載されている。それによると『傳承文藝』創刊号は昭和三十八年にガリ版刷りで創刊され、二号からタイプ活字版となり、同研究会の探訪の報告書として刊行され続けた。花部は、中央のエリート層がとらえた理念としての民話を追求した民話ブームが次第に退潮していくなかで、「地方出身者や、親が大学とは関係ない」学生が多かつた同研究会は、「自分の生育環境と大きく違ひない調査地」で「地域の人々と接しつつ、ありのままの資料の収集に励んだ」と語る。その後同研究会は、平成十一年に新入会員一名となり四年後に「存続を断念」している。

しかし卒業生は、こうして資料集を出した。学生時代の若さと熱気が過ぎるなかで、聴

き取りの成果が単なる青春の思い出のなかに埋もれてしまうのは、ありがちな話だ。ところが、約四十年もたつて、それぞれのその後の歴史と生活を抱えた卒業生が、過去の記憶と記録を解凍し、こうして資料集をかたちにしたのである。驚きと尊敬を禁じ得ない。

編集責任者のひとり野田真知子氏は「編集後記」に、調査地の四十年を、平成の市町村大合併など「社会情勢はめまぐるしく変化し」、「さらに東日本大震災や台風十号の大災害に次々と襲われました」と記している。そうした今日の状況のなかで過去の記録の意味が殊更にあることを自覚しての、強い責任感もうかがえる。

そういえば、宮城県気仙沼市・本吉郡での探訪報告である『傳承文藝』二十一号（平成二十一年）も、二十七年経って卒業生・故佐野正樹氏が中心となり発行したものだ。これまで日本の口承文芸研究を文字通りリードしてきたこの大学の、裾野の広さある強靱さをもののがたる報告書でもあるに違いない。

（重信幸彦）

（二〇一八年六月二十日発行）

『ロシアの歳時記』

ロシア・フォークロアの会なるうど編著
東洋書店新社刊

ロシアの口承文芸学、民俗学に関心を持つ「なるうど」同人たちによる歳時記である。年二回発行の同人誌は昨年秋で77号となり、三十九年間休まず発行されてきた計算である。

書名は『歳時記』だが内容は民衆生活全般に及び、伝統的な暮らしぶりが季節を追って記されている。目次には昔話、民謡、妖怪、子どもたちの遊び、蒸風呂小屋、パン、キノコとベリー、保存食、農作業、放牧、養蜂、機織りといった項目が並んでいる。

「まえがき」にはロシア民間暦の説明があり、冬至と夏至を二大節目とした太陽暦に移動祭日加わって成立していることがわかる。ロシアでは新年はいつからはじまるかという、ロシアに関心を持つ人が必ずぶつかる問題についても、古い民衆暦では年のはじめは春を迎える三月だったが、ロシア正教の影響で九月一日に改められ、さらに一七〇〇年にビョートル大帝により一月一日に改められた経緯が説明されている。

本文の構成は冬にはじまり、秋で終わる。各季節の冒頭では、月ごとに自然の移ろいや行事が詩的な文章で綴られ、ロシアのどこか田舎町か森の中を散策しているような気分にしてくれる。ロシア人は「根っからの農耕の民」なので、農作業については詳細な記述がある。中でも春の「土起こしと種蒔き」、夏の「草刈りと麦刈り」、秋の「亜麻と機織り」は楽しい。「放牧」も興味深い。社会的地位が低かった牧夫が強い呪力を持つとされ、共同体の中で恐れられていたことは筆者も北ロシアでしばしば耳にした。「村の婚礼」では花嫁の泣き歌や婚礼前夜の儀礼など、今では見られない習俗について書かれている。

口承文芸に関する項目には「冬の妖怪シュリクン」、「昔話」、「冬の民謡」、「ルサルカ」がある。「昔話」の項では、手仕事をしながら語りに耳を傾ける人たちの姿が描写されている。魔法昔話に登場するヤガーばあさんについては、善悪両義的性格について説明されている。本書のあちこちに散りばめられている諺や慣用語はロシア語の豊かな表現力を感じさせてくれる。妖怪の中では目次に登場するのは水辺の妖怪としてはマイナーなシュリクンとルサルカである。本書はシュリクンの

起源についてスラヴ起源説を採っているが、先住民からの借用説もあり、一言触れておくべきだっただろう。この妖怪が活躍する地が東スラヴではロシア北部とシベリアに限られているからである。

かまどであり、暖炉であり、風呂でもあるロシアのペーチについては、火の崇拜、祖霊崇拜との結びつきの説明がないのは残念だ。ペーチが文字通りロシア人の生活の中心に陣取ってきたのは実利的な理由によるだけではない。この説明がないと、なぜ昔話の主人公がいいつもペーチの上にいるのかが理解できず、イワンはたんなる怠け者になってしまう。もう一点付け加えれば、ペーチはロシア人にとって母の胎内でもあった。ヤガーばあさんの家に迷い込んだ子がペーチの中へ入れられそうになる背景にはそうした民間信仰がある。

各季節のエピソードを飾るのは、ロシアの誇る作曲家チャイコフスキの音楽歳時記〈四季〉である。ピアノが奏でる情景が目に浮かぶような解説は秀逸である。季節ごとに挿入されている「column」は古きロシアの日常を活写している。

(二〇一八年六月／本体二、三〇〇円)
(齋藤君子)

『たつやまの民話』

二本松康宏監修 稲葉夏鈴・岡田真由子・
小林由芽・玉置明子・中谷文香・毛利とわ編
三弥井書店刊

本書は静岡文化芸術大学の二本松ゼミの学生による静岡県浜松市の北遠地区からの昔話調査報告書である。天竜区龍山町は山間の典型的な過疎地で、かつては天竜川の水運による林業や鉾山開発、秋葉山参詣、ダム建設などで栄えた時期もあったが、今日では人口減を食い止めるべく様々な施策が講じられている。成果がやや危惧されたが、平成二十六年から四年越しの同区水窪町での調査経験が活かされ、話数や話柄は決して多くないが、当地域においても注目すべき話や話者との出会い、民俗の聞き取りなど、資料として見るべきものがあり、また学生自身の手になる解説も充実している。県内の資料としては戦前の『静岡県伝説昔話集』が知られているが、当該地域に限定した昔話報告書はなく、実地の調査が最早困難とされる時代に、半世紀前のガリ版刷りの昔話集と同じ労力を注いで出来た本書は貴重であり、まさしく彼らの汗の結晶といえよう。本書が水窪町での成果と合わせ、有効に活用されとともに、この経験が彼らの人生の力になればと願う。(松本孝三)

(二〇一八年三月／本体一〇〇〇円)

『何かが後をついてくる
妖怪と身体感覚』

伊藤龍平著
青弓社刊

妖怪文化研究はここ二〇年、様々な研究者の参加により発展してきた。だがその中心は絵画化された妖怪のビジュアルと、創作文化の中での変遷にあったことは否定できない。しかし妖怪は創作のキャラクターとなる以前に、生活の中で語られた妖怪、感じられた妖怪として民間伝承の中に息づいていたはずなのである。

妖怪文化研究の二〇年と並走してきた著者が本書では、妖怪を「身体感覚の違和感のメタファー」が「個人を超えて人々のなかで共有されたとき」(本書一四頁)に生まれるものとして、妖怪伝承を「五官(目・耳・肌・鼻・舌)に働きかける「五感(視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚)」の身体の実感と、それをこぼやけはなしにして伝えようとする」となみに戻して、妖怪伝承の生れ出る現場に迫ろうとしている。妖怪伝承を、身体感覚(の違和感)の経験が語りとして結実する過程として捉えることの重要さと、語りの生れ来る身体感覚の重要さを本書は示唆しているといえるだろう。

(二〇一八年八月／本体二〇〇〇円)

(飯倉義之)

『ユーラシアのなかの宇宙樹・生命の樹の文化史』

山口博監修、正道寺康子編
勉誠出版刊

大地の中心にそびえて天を支え、天と地の交流をもたらす巨大な樹木「宇宙樹」、そして再生と豊穡の「生命の樹」のイメージは、年代・地域・民族により様々な形をとって繰りかえし表出される。本書は、古代から現代に至る宇宙樹・生命の樹の思想と精神文化、そのベースとなる樹木崇拜・巨樹信仰の諸相を、ユーラシア北方から日本への文化伝播に焦点を当てながら、民俗・考古・歴史・神話・文学など多角的な観点から論考を集め、浮かび上がらせようという試みである。内容も二部から成り、ユーラシア大陸における宇宙樹・生命の樹について明らかにするものと、樹木信仰が文学等のなかでどのように変容したかを語るものである。当学会からは、荻原真子氏、于曉飛氏、小峯和明氏、兵藤裕己氏等の名前が並ぶ。宇宙樹の描き出す世界のスケールのおおきさに圧倒されるとともに、身近な一本の木に悠久の時間とそれを貫くものをみる人間の感覚のふしぎに胸をうたれる。

(二〇一八年二月／本体二八〇〇円)

(松村裕子)

『語りのメソッド』
イタリアの民話をたずねて

劍持弘子著
三弥井書店刊

イタリアの昔話に精通する劍持氏が、京都にあるイタリア会館の会誌「コレンテ」に掲載された文章に手を入れられ一冊の本にまとめられた。劍持氏がイタリアの昔話に関心を抱くようになったきっかけから、イタリアで暮らし、「語り手はいなくなつた」と言われていたイタリアで語り手と出会つたこと、イタリアの昔話が失われるように語り手の声に丹念に耳を傾ける研究者と出会つたこと、日本での昔話研究、そして現在人居中の老人施設から見る民俗世界までが綴られる。合間に挿入されたイタリアの民話も楽しい。本書からは、意思さえあればいつでも、いつからでも研究は可能である、という強い思いが伝わってくる。「あとがき」にイタリアの昔話資料を受け継ぐ人を探しているところある。イタリア語が堪能で、イタリア文化にも昔話にも造詣が深い人は稀であろう。それでも「意思さえあれば研究は可能」と本書は呼びかけている。

(杓村裕子)
(二〇一八年二月／本体一八〇〇円)

『子ども文庫の一〇〇年』
子どもと本をつなぐ人びと

高橋樹一郎著
みすず書房刊

現代の語りの舞台として、図書館や観光施設「子ども文庫」が挙げられるようになって久しい。子ども文庫とは、主に子どもに向けて開かれていた私設図書館と説明したなら良いだろうか。戦後、石井桃子『子どもの図書館』（岩波書店）に触発されて文庫を開いた人々がいた。そのなかには、子どもへ豊かな物語を届けようとストーリーテリングの勉強を重ねている過程で、自身が子どもの頃に聞いた語りを思い出し、語り手として活躍を始めた人もいる。現代の語りと縁の深い「子ども文庫」だが、これまでその歴史や社会的影响力についてはまとめられた書物はなかった。本書は、子ども文庫の担い手が主に女性であったことや、公共図書館設立の原動力となったことを例にあげ、女性の社会史や市民運動の展開として再評価しようというものである。語りについて触れている箇所は少ないが、現代の語りの背景として一読の価値がある。

(杓村裕子)
(二〇一八年二月／本体三〇〇〇円)

『命の水 チェコの民話集』

カレル・ヤロミール・エルベン編
阿部賢一訳
西村書店刊

チェコの詩人で民俗学者のエルベン（一八二一年―七〇年）は「チェコのグリム」と呼ばれている。一九世紀初頭のプラハではドイツ語が公用語として用いられていたが、ナポレオン戦争後チェコ語で書かれた文章が集められ研究されるようになる。司書でもあったエルベンはチェコ語の資料とボヘミア地方での聞き書きから、スラブ地域にわたる民話、民謡、などなぞ、ことわざを集めて書き残した。現在でもチェコの子どもの彼らの詩をよく知るといふ。本書はエルベン生誕二〇〇周年を記念して発行されたアンソロジーの全訳である。グリムと似た話が多いが、それだけ当時の文化の交流が豊かであった様子や、エルベンの詩的な表現がチェコの国民意識高揚に貢献したであろうことが伝わる。回虫を退治することわざも興味深い。チェコ語のオリジナル版でも、邦訳版と同じ出久根育の挿絵がつき好評を得ているそうだ。

(杓村裕子)
(二〇一七年一〇月／本体一三〇〇円)